



矢板史上最大の 市民力を発揮する時！

二月二十五日、指定廃棄物最終処分場候補地の選定の見直しが発表された。

市民同盟会の設立、一万人集会、国会デモ行進など大きなイベントを経て、反対運動は一つの成果を得たと言える。しかし、問題は解決されたわけではなく、次のステップを迎えただけだ。

現地に行くと、目で見て、声を聞いて、初めて分かることもある。今回、かわら版記者は、現地の生の声を聞くために、塩田反対同盟の本部にお邪魔した。

●長丁場を想定して
政権交代で、看板作りのや、署名活動など一段落し、塩田の住民の皆さんも、今は少し落ちついてきた。しかし、まだまだ先が見えず、長丁場になることが予想される。そこで、行政区の話し合いで、

住民から二人、実行委員のメンバー十三人の中から一人、必ず三人が塩田公民館前の簡易テントの本部に当番制で詰めることになった。塩田反対同盟代表の小野崎俊行さんは、「今は、居ること自体に意味がある。地元が折れてしまうと風化する。たとえやることが無くても居ることが重要だ」と話す。

●住民の生の声は
みぞれが降る寒い日の午後、薪ストーブで暖かいテントの中で当番の方も含め数人の方に話を聞いた。

「矢板市民全体の誇りは高原山。その環境は宝物。みんなが守れと言う」

「自分の実家の方に行くと、看板もののぼりも立っていないくて、頭が痛くなってしまう。もどかしくて仕方がない」

「今回の処分場計画には焼却炉が付いているというこの意識が薄



塩田公民館前の反対同盟本部

いと思う。」

「子育て中の母親は、『処分場ができたら出て行く。住めない』と話していた」

「人がいなくなるといふことはまちがなくなるといふこと。経済が成り立たずゴーストタウンになることをイメージして欲しい」

「原発事故の後米を送っていたのに、候補地になったとたん、米はもういらないとされた。形も何もできないのに。これ

が風評被害なんだと思うた」

「自分も知らなかったが、放射能の勉強をもってして欲しい。放射能の毒性と影響力が、何百年という長いサイクルで続いていくということを初めて知った。チェルノブイリやスリーマイルは今までは遠い世界の出来事だったが、今は身近な問題として勉強しなければならぬ」

●当事者意識の高まり
塩田の住民が抱える苦勞や不安は多様だ。反対運動によって生活のリズムが一変したことや、反対運動の意識が地域によってかなり温度差があることにたいするもどかしさ、そして風評被害など。

これからの反対運動では、市民が当事者意識をさらに強めていくことがもっとも大事なポイントになるだろう。その意識の高まりが、最前線で戦う塩田の皆さんへの励ましにもなり、同時に、白紙撤回への大きな推進力になっていく。

(M・O)

東京デモ行進報告



東京の街に断固拒否の旗が

十二月二日の長峰公園での「一万人集会」に続いて、十二月二十日、東京日比谷野外音楽堂での決起集会と国会周辺のデモ行進が行われた。

バス六台を連ねて、東京で合流した人を含め、約三百五十人が参加。決起集会会場のすぐ近くにある環境省のビルに向かって、決意を呼びかけたあと、日比谷公園から首相官邸・国会議事堂・自民党本部ビル前まで約一・五キロをデモ行進した。

警察官の先導で車道の左側を行進、首相官邸が近くなってきたら、むしろ旗やのぼり、そしてシュプレヒコールは禁止となり整然とした行進となった。

歩道には警察官と報道陣が我々の歩調に合わせて歩き、途中、環境省、参議院議員、自民党環境部会長に決議文を手渡し、決意を伝えた。

東京の国会周辺で矢板市民の意思を表明し、バス代、昼食代含めて四千円のデモ行進ツアーだった。

(T・M)

十二月二日の長峰公園